

小学校教育からの出発

1章でも触れましたが、私の漢字教育の実践は、まず小学校教育からスタートしています。石井式漢字教育というものをより深く理解していただくために、小学校教育から幼児教育へと至った経緯について、駆け足でご紹介しておきたいと思います。

少々古い話になりますが、昭和 26 年、高校、中学の教員を経て、当時東京部八王子市教育委員会の指導主事を務めていた私は、全国国語教育評議会の小学校部会で、「“学校”という言葉、社会には実在しない“がっこう”という表記ではなく、はじめから“学校”という漢字で教えたほうがよいのではないか」という意見を発表しました。

もっとも、このときは「子どもにとって、漢字がかなよりやさしい」という事実を私自身まだ理解していませんでした。「“がっこう”という表記で覚えても、これでは、せっかく学んだものが社会で用をなさないうえ、読み書き能力も育たない」と考えてのことでした。

ところが、こうした私の意見は、文部省の基本方針を批判するものと受け取られ、ほとんど黙殺される格好となりました。そこで私は「この際、自分の考えを自ら実践して、確かめてみよう」と考え、新たに小学校教員免許を取って小学校の教師となったのです。最初に赴任したのは、残念ながらすでに廃校となった新宿区立淀橋第一小学校です。そして、その後は同じ新宿区立の四谷第七小学校で教鞭を取るようになりました。

実際に一年生を担当して、はじめから“山”“川”“字校”と漢字で教えてみますと、子どもたちはたちどころに覚えてしまいます。そればかりか、文章もかな書きよりも漢字かな交じり文のほうが、ずっとすらすら読むではありませんか。漢字は難しいどころか、かなよりずっとや

さしいということが、このとき、はじめてわかったのです。

当初、私は一年間で 300 字くらいを目標にしていたのですが、子どもたちは面白いように漢字を覚え、一年生でもほとんどの子どもが 500 字くらいは楽に読めるようになることがわかりました。

そして、これだけの“漢字力”が身につくと、五年生程度の本をいきなり与えても臆することがありません。読めない漢字が出てきても、読解力があるので「当たらずと言えども遠からず」の読み方で、どんどん読み進んでいけるのです。

さらに、現場での経験を重ねていく中で、漢字を丸暗記する力は一年生のときが最高で、学年が進むにつれて低下するものであることを発見しました。一方、暗記より理屈で考えることが得意になる高学年の漢字教育では、部首など漢字の成り立ちから意味を教える解字指導が不可欠であることを発見し、漢字漢文の全国大会にクラスの児童全員を出席させて公開授業を行い、小学生でも解字指導によって未知の漢字が解読できることを参会者たちに披露したりもしました。

この間に、私を支持してくれていた校長が退職し、後任に石井式に批判的な新校長がやってきたという事情もあって、担任した新一年生を二年間、文部省指導要領に従って教えたことがありました。ところが、これは両者を比較する絶好の機会となり、そのおかげで石井式がこれほどすぐれた教育法であるかを、改めて確認することができました。

そして昭和 36 年、私は、その二年間の文部省式教育と、それに先立つ三年間にわたる石井式教育との結果を比較したもの、さらにその結果により確信を得た新石井式教育の一年間の成果をまとめた『私の漢字教室 石井学級の実験報告』を上梓したのです。